

## 12 歯科衛生士・言語聴覚士・歯科医師による 摂食嚥下リハビリテーションアセスメントシートの作成

江川広子<sup>1</sup>, 阿志賀大和<sup>2, 3</sup>, 河野雅之<sup>3</sup>, 小林智美<sup>3</sup>, 牧野真理<sup>3</sup>, 野村章子<sup>4</sup>

明倫短期大学 <sup>1</sup>歯科衛生士学科, <sup>2</sup>新潟リハビリテーション大学,

明倫短期大学 <sup>3</sup>附属歯科診療所, <sup>4</sup>歯科技工士学科

keywords : 摂食嚥下リハビリテーション, アセスメントシート

### はじめに

摂食嚥下障害を有する患者の多くが全身疾患や障害を抱えており, 歯科医療の現場においても口腔および嚥下領域のリハビリテーションの役割を担う必要がある。現在, 附属歯科診療所で摂食嚥下リハビリテーションを実施している患者は, 来院患者17名, 介護保険施設ならびに在宅での歯科訪問診療患者6名である。このような患者に安全かつ効果的なリハビリテーションを行うためには, 口腔関連の情報にとどまらず全身状態の情報を得る必要がある。そこで, 摂食嚥下リハビリテーションを効率的, 効果的, 継続的に実践するために, 歯科衛生士・言語聴覚士・歯科医師が協働して評価表(以下, アセスメントシートとする。)の項目を見直したので報告する。

### 対象および方法

我々が見直しの際に参考にしたアセスメントシートは, 以下のとおりである。

- ①歯科衛生士のための摂食嚥下リハビリテーション“歯科衛生ケアアセスメント票”(医歯薬出版)
- ②日本摂食嚥下リハビリテーション学会簡易版“摂食嚥下評価表”(以下, 嚥下リハ学会簡易版と略す。)
- ③N大学医歯学総合病院で使用している“摂食嚥下評価表”

歯科衛生士・言語聴覚士・歯科医師の視点でアセスメントに最適な評価項目を抽出することにより, 摂食嚥下機能の問題事項を把握・分析し, 摂食嚥下リハビリテーションの計画立案に繋がられるような項目立てが決定された。

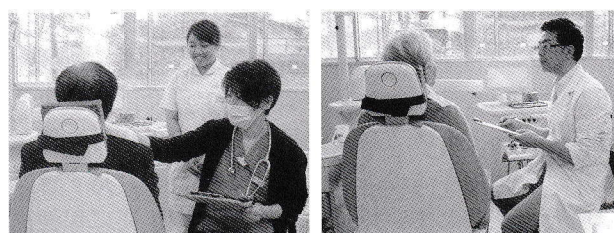


図1 DH・STによるアセスメント実施

### 結果および考察

摂食嚥下リハビリテーション外来で当初に使用したアセスメントシートは, 歯科衛生士教育の臨地実習で利用していたため, 歯科的専門性があった。そのため言語聴覚士は評価表として記入する際に, 歯科的項目の記入の難しさを指摘していた。このことは, 歯科衛生士領域と言語聴覚士領域における評価基準の違いに起因すると考えた。一方, 嚥下リハ学会簡易版は, 多職種が使用する項目立てになっているため, 歯科診療所で評価できない項目(VF・VE)も含まれていた。今回作成したアセスメントシートは, N大学医歯学総合病院の評価表を参考にした。その際に検査機器を利用する項目は削除し, 領域ごと分類された項目を吟味したところ, 目標設定, 計画立案が容易に導かれて, 有効なリハビリテーションの介入へと繋がることが分かった。

### まとめ

効果的なリハビリテーションの実施には, 多職種が関わり, 共通の評価基準に基づく情報収集と分析が重要であり, それを踏まえてリハビリテーションの技術を共用することで, 患者の摂食嚥下機能の回復と向上ならびに心身の健康維持に繋がれると考えている。